海外だより

# ISSA総会に出席して

健康保険組合連合会社会保障研究室　一圓　光弥

I

国際社会保障協会（ＩＳＳＡ）の第19回総会が，10月の４日（火）から14日（金）にかけてスペインの首都マドリッドで開催され，岩越健保連会長のお供としてこれに出席する機会を得た。４年前にＩＳＳＡのアジア・オセアニア地域の医療保障に関する円卓会議に出席したことはあるが，世界各国の代表が集まる総会に出席するのははじめてで，開催地マドリッドも私にとっては初めての土地とあって，新たな経験に対する期待と不安を胸に，９月30日夜ロンドンへ向け出発した。ロンドンで一泊の後，10月２日の昼マドリッドに到着したが，秋の身仕度しかしてこなかった私には，寒いロンドンは真冬に思え，暑いマドリッドは真夏にも思えた。

緑に包まれた豊かな国土というのが，機上から見るヨーロッパの印象であったが，機がイベリア半島に入り，南下するとともに緑は次第に消え失せ，眼下に展開するのはただただ褐色の地肌ばかりとなっていった。その荒れた大地の小高い丘の上に，400万近くの人口を抱える首都マドリッドがそびえていた。

その日の夕刻，市の中心を東西に走るホセアントニオ通り，市の東部に位置する広大なレティロ公園を散歩してみた。立派な高層建築が建ち並ぶ市街といい，いくつもの大掛りな噴水といい，また遠々と続く木立に包まれた公園といい，私を囲むマドリッドはパリにも似た美しいヨーロッパの街の姿をみせ，機上から得た荒涼としたスペインの印象はすっかり消えていった。

その後各国代表やその家族の方々と共に，バス26台を連ねてマドリッドの南方70キロに位置する古都トレドを見に行く機会を得たが，「ヨーロッパ的」な都マドリッドを一歩出るや，荒れはてた大地あるのみで，機上で得たスペインがまたよみがえった。そのいずれもがスペインであると言ってしまえばそれまでであるが，滞在期間の短い私には二つの印象別々のものとしか映らず，その度に私のスペインは右往左往する有様であった。

同様のことは，トレドで大聖堂やシナゴーグを訪ずれた時にも感じられた。その古い狭い城下町に，キリスト教，回教，ユダヤ教といった異った文化が入り乱れてその影響を残し，数時間のかけ足観光をした私には，さながら博物館にでも来たようなめまぐるしさであった。十分な下調べもなく短期間訪問しただけの私には，これら異なる文化が編みなす一つのスペイン像を感じることができず，いったいどれがスペインなのかという問いが最後までつきまとった。

II

３日の午後会議場で登録をすませ，欠けていた資料を補い，翌４日朝から総会に出席した。

総会はＩＳＳＡ活動の中でも最も重要な事業の一つで，原則として３年に一度開催され，過去３カ年の活動を検討し，以後３カ年の事業内容を討議し，決定するほか，各専門委員会の委員や報告者を改選し，規約の改正等を行うものである。

前回の第18回総会は，1973年10月に象牙海岸のアビジャンで開かれており，今回に限っては以来４年目の総会ということになる。また今総会は，ＩＳＳＡの前身である欧州の医療保険関係者を中心とする国際会議が，1927年10月にジュネーブで開催されて以来ちょうど50周年目の記念すべき総会となり，世界百数カ国から1,000名に及ぶ代表が参加するという，かつてない盛況ぶりであった。

日本からは健保連のほか，社会保険庁長官の曽根田氏，労働事務次官の藤縄氏，労働省雇用保険課長の望月氏，全社連理事長の加藤氏がそれぞれ代表として出席した。

会議は市北部にあるパラシオ・デ・コングレソスと呼ばれる国際会議場で行われ，10月３日から14日までの間，役員会，評議員会，総会，各専門委員会が，日曜日を挟んで開かれた。

このうち全代表が一堂に会する総会は４日，11日，13日の三日にわたって開かれ，４日には事務総長リース氏による事業報告と十数名の関係代表による地域活動の報告が，11日には規約の改正が，13日には会計報告と各専門委員会の討議結果の報告がなされた。

５日から10日までの間には，10の常設専門委員会と２つの特別委員会が開かれ，それぞれ午前と午後にわたる１日のセッションを通して，これまでの調査研究活動の報告，今後の活動内容の検討を行い，委員の改選を行っている。

その他４日と14日の夕刻には，スペイン保健社会保障相とＩＳＳＡ会長の主催によるレセプションが開かれ，その間各専門委員会の会議日程と並行して10ほどの関係機関，施設の見学が組織されていた。また観光としては先に述べた９日（日）のトレド旅行のほか，同行の家族のためにも市内見学等が用意されていた。

Ⅲ

４日午前のオープニング・セッションでは，主催国スペインを代表して保健社会保障大臣が演説した。スペインが政治・社会の民主化を強力に推進しようとしていること，民主化の遅れているスペイン社会にとって社会保障の役割は重要で，民主的な社会保障の推進を通して，スペイン社会自体の民主化を推進してゆかなければならないことを強調していた。長期にわたる独裁制とそれによる国際的な孤立から脱却しようとする新しいスペインの姿勢を印象づけられた。

４日午後の事務総長リース氏の報告は，過去４年間の社会保障の動向をまとめた部分と，その間のＩＳＳＡの活動をまとめた部分とからなっていた。

社会保障の動向については，この時期に各国の社会保障が一層の発展をとげた点を喜ばしいこととしながらも，特に先進国を中心に，社会保障の拡大や前進をささえる経済的な基盤がこの期間を通して大きく崩れて来ている点を指摘していた。

社会保障の発展をあたりまえのこととして受けとめる時代は終り，これからはその費用をどう抑制するか，限られた資源をどう有効に利用するかについて真剣に取り組んでゆかなければならない。さらに，これまで社会保障は経済的な側面からのみ捉えられることが多かったが，これからの社会保障を考える場合には，雇用意識などのような社会的要因についてももっと検討してゆくべきではないか，などの点を強調していた。

総会には先進国だけでなく，発展途上国や社会主義国の代表も多数参加している。リース氏の報告も当然そうした国々の社会保障の動向を含めていた。しかしそれらにはごく簡単にふれただけで，先進資本主義国を中心とする社会保障の新たな課題が，彼の報告の重要な論点になっていたことは，今総会の事務総長報告の注目すべき点であろう。オイル・ショック以後はじめて開かれる今総会の特徴が，ここにも現われていた。

ＩＳＳＡ活動についてふれた部分では，特に今後の活動のあり方について興味ある考え方が示されていた。ＩＳＳＡの活動は大きく分けると，社会保障の各分野ごとに設けられている10ほどの専門委員会の調査研究活動，ヨーロッパ，アフリカ，アメリカ，アジア・オセアニアの４地域に分かれて行う地域活動，ＩＳＳＡ事務局が個々の会員の求めに応じて行う直接的な情報提供，援助活動の三つからなっている。今後ともこれら三つの活動を中心に，ＩＳＳＡ活動を強化推進してゆく考えに変化はないとしながらも，中でも地域活動の強化が特に重要となっているとし，地域活動の比重を一層高めてゆきたいと述べていた。

言うまでもなく，半世紀の長きにわたってＩＳＳＡ活動をささえてきたのは先進諸国であり，活動の中心は専門委員会であった。専門委員会での調査研究活動は，そこで積極的な役割を果たしてきた先進諸国の高度に発達した社会保障を前提として，専門的，技術的な問題にしぼられがちであった。したがってその活動は，発展途上国の問題意識とはそぐわない点が多かった。

ＩＳＳＡは今では百カ国を越える世界各国の代表からなる大所帯である。そうした中で発展途上国のニードにこたえてゆくということが，今後のＩＳＳＡ活動にとって不可欠の要素となっていることは容易に想像できる。そしてその求めに対するリース氏の解答が，地域活動の強化であったのである。アジアやアフリカの代表の方とお話しする機会もあったが，地域活動を強化することは当然のことと受け取って，リース氏の報告を歓迎していた。

その他リース氏の報告には，50周年にちなみ，これまでのＩＳＳＡ関係者の業績をたたえる部分や，専門家を養成するための奨学金制度設立の提案なども含まれていた。

Ⅳ

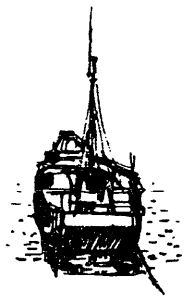
各種専門委員会のうち，私が出席したのは失業保険・雇用維持委員会，医療保障・疾病保険委員会，老齢・廃疾・遺族保険委員会，共済組合委員会の４委員会である。

共済組合（ mutual benefit societies ）委員会での議論は他の委員会のそれとは若干趣を異にしていたが，他の三者については，リース氏の報告に見られた２つの特徴が，活発な討議の中に現われていた。

第１は，先進諸国を中心に，厳しい経済情勢の下で，新しい課題に社会保障はどう取り組んでいったらよいかの議論である。第２は，これとは全く異なる社会的背景下にある社会保障の問題を，委員会の調査活動の中に取り入れさせようとする先進諸国以外の国々の主張である。

この二つの流れは残念ながら調和を保っているようには思えなかった。むしろ，先進諸国の関心に焦点を合わせて調査を進めれば，その他の国々の問題からははずれてしまい，その他の国々の問題をも広く取り入れて委員会活動を行うと，逆に先進国の問題がぼけてしまう。そんな相矛盾する討議のように思われた。

委員会の調査研究活動は，会員に発送するクエスチョネアーの内容に大きく規制される。そしてその内容がこれまで先進諸国中心になりすぎであったというのが，社会主義国や発展途上国の不満である。これら社会経済的背景の異なるすべての国々を満足させるクエスチョネアーを作成することは決して容易ではなく，結局は，先進諸国を中心に作成された事務局案が，若干の可能な修正を経て採択されていた。

そうした中で，私の出席したどの委員会のクエスチョネアーにも日本からの回答が含まれていなかったことは，残念に思えた。ある委員会の委員長は，社会的な背景が異なればそれだけ，回答を作成するのは容易なことではないと前置した上で，回答を寄せる国が欧州先進諸国中心になりがちな中で，例えばアジアの，日本からの回答が追加されるようになれば，委員会活動の印象もそれだけ良くなるのだがともらしておられた。

国際的な場での日本の位置をつくづく考えさせられる発言であった。ＩＳＳＡ事務局の方とお話しした時も，日本に対する同様の期待を感じさせられた。期待と言えば聞えは良いが，裏を返せば消極的な日本の姿勢に対する不満でもある。ＩＳＳＡに対する取り組みが，少しでも改善されるよう，ＪＩＳＳＡ内部で可能な限りの工夫が実施されることを強く望む次第である。